

『悲劇的序曲』は、ブラームス（1833～97）が1881年に作曲したもので、『大学祝典序曲』と対になるものである。『大学祝典序曲』は、1879年に Breslau 大学から名誉博士の称号を贈られた返礼に作曲したという経緯がある。が、この『悲劇的序曲』は、その成因について具体的な動機は知られていない。一説によると、ゲーテの『ファウスト』の劇音楽の為に他の曲と合わせて用いられることになっていたが、劇の上演が中止され序曲だけが残ったということである。が、定かでない。彼が、出版商であり、後に彼の財産管理人ともなったジムロック宛の書簡の中で、「非常に快活な大学祝典序曲を書いている時に私の気持ちは憂鬱になり仕方がないので、悲劇への序曲を書くことにした。」というように、彼自身の内面的な創作への意志が、その成立の動機といえることができる。結局『悲劇的序曲』は、1881年1月4日に、Breslau の学位授与式で『大学祝典序曲』と『交響曲第2番』と共に上演され、熱狂的な喝采を浴びている。メンデルスゾーンを思わせる木管楽器群の管弦楽法や、彼特有のリズム型がこの序曲の本質であろうか。

『オーボエ協奏曲』は、1945年から翌年にかけて書かれたもので、シュトラウス（1864～1949）の最晩年に作曲されたものと言ってよいだろう。この頃には、すでに彼は作品番号を付けていないらしく、正確な作曲年代や作曲順は不明だが、彼の数少ない8曲という協奏曲の中でも仕舞いの方の作品である。この作品について、「シュトラウスの最初期の作風に帰った」という評まである。例えば第1楽章でのソナタ形式や主題の自由な変奏は、彼の緩やかな形式観によるもので、作法の簡素化、非装飾化を極めたものといってよいだろう。創作の前半期に於ける彼は、ワグナーの、また同時代人のバルトーク、シェーンベルク、ストラヴィンスキー、ドビュッシーらの亜流であり、彼等を素にした実用家的存在であった。そのソフト作曲家振りが、ベルリンやウィーンの音楽界に人気が高かったわけである。がその華やかな市民社会もナチスドイツの敗戦と共に喪失してしまった。しかし皮肉なことに、彼は自身を束縛していた人気という桎梏からも同時に解放されたのである。

この協奏曲は、どちらかと言うと『ソロオーボエとオーケストラ伴奏の為の曲』のようであり、またソロオーボエの管弦楽法には彼の老怪な、「心の欲する所に従いて、矩を踰えず」の境地が感じられる。

『交響曲第5番・宗教改革』は、メンデルスゾーン（1809～74）が、1829年から翌年にかけて作曲したものである。標題から窺い知れるように、これはライプツィヒで催される予定の、ルターによる宗教改革300年祭を目標として作曲されたものである。ルターの宗教改革は、1517年に始まるというのが現在日本の定説である。が歴史学的見地からすると、これには諸説あり、19世紀当時では、帝国議会に『アウグスブルク信仰告白』をルター側が提出した1530年をその起源としている。ルターの言う聖書主義が儀礼主義的カソリックに反対する姿勢がまさにこの文章中にある。曲全体の構成もその通り、第1楽章が序奏部に「アーメン」を配してカソリックを表現し、第4楽章がルターの「コラール」（新教の衆讃歌の意）を置いて、新教を表わしている。各楽章は、この2つの主要な旋律の素材を基に連関しており、内容的には、「コラール」が全体を覆い尽くして大団円となるように構成されている。

第3楽章を除いては、メンデルスゾーン特有の旋律の甘美さが少ないようであり、宗教的内容を含んでいるために、彼の5つの交響曲の中では比較的上演機会に恵まれない方である。これは初演に際しても言えることであり、その機会であった1830年6月25日に催される予定の宗教改革300年祭は、実は中止となってしまったのである。カソリック教会からの抗議（プロテスト）が要因であった。1832年になって、彼自身の指揮によりベルリンで、初演されることになる。第4楽章冒頭の「コラール（我らが神は堅き砦）」は、ルターが考案した旋律によるものである。メンデルスゾーン家は、ユダヤ人の家系であり、本来はユダヤ教徒であったが、父の代から新教に改宗しており、ハンブルクに生まれ育った彼はごく自然にこれらルター派のコラールなどに接していたのである。信者の耳には、この旋律の有様で十分に「宗教改革」を聞き取ることができるのであろう。（藤井部 勉）